

向くだろう。教育とは可能なことから少しずつ改めてゆくべきものではないか。そのステップとして来年度から国立大学入試に共通一次試験が実施される運びとなったが、これにもすでに多くの立場から批判の声があがっている。大学人の中には、どうせ首尾よくゆくはずがないと冷笑の眼で見ている者がある。そしてその人たちに入試や教育制度に対する改革の熱意があまり感じられないのは、ひが目であろうか。「現状でよい」とする7%の中には、意外に大学教授たちが多数含まれているのかも知れない。

スンドボリイ教授の来日

式 正 英

スウェーデン、ウプサラ大学のオーケ・スンドボリイ教授は、河川地形学者、1921年の生まれである。同大学理学部副学部長、自然地理学教室主任、アカデミー会員とならべると近付き難い権威を感じずるが、碧眼、銀髪、長身のケネディー、カーターに似た温容の紳士で親しみ易い人である。夫人も学生時代は生物地理学を専攻され、穏かな可愛いらしいタイプの人柄である。この御夫妻が昨年1977年10月11日から11月24日まで来日された。スンドボリイ教授夫妻の来日と私との間には、いささか関連があるのでその辺に触れてみたいと思う。

人の縁とは不思議なものである。1972年の半年間のヨーロッパ滞在を、私は初めストックホルム大学のホッベ教授の所だけにしぼって計画していたが、うまく連絡がとれず、そのためミュンヘン大学とウプサラ大学に夫々3ヶ月ずつ滞在する結果になった。初めはウプサラには数日遊びに行く程度に計画していたのだが、スンドボリイ教授と連絡がとれるようになってからは考えが変わった。「君は（ストックホルムのような）大都会の喧騒を好むか、静かに勉強できる環境を選ぶか」という殺し文句のお手紙を頂くに及んでは、ウプサラ滞在の決意を固めない訳にはいかなかった。

ウプサラ大学はスウェーデンでは最も権威があり、ストックホルム、ルント、ヨーデボリイ等各地の大学の教授陣の多くはウプサラの出身者と言っても過言ではない。植物学者リンネを始め、世界的に著名な学者を輩出しているし、昨年は創立500年祭が行なわれたと云うから、その重味は漸く100年祭を迎えた日本の大学の比ではない。日本からの地理分野の研究者の長期滞在者は私が初めてであった。スンドボリイ教授は、滞在中の私の宿舎の世話や、私の申し出に悉く応えて下さって、嫌な顔一つされたことはない。休日には家族連れハイキングに招待して下さったりして、私の無聊を慰める気遣いまでして頂いた。とくに教授自ら私だけを案内して、御自分のフィールドのクラールヴエン川流域を、三日がかりで連れ歩いて下さったのには感激した。

スウェーデンで直接お付き合いさせて頂いて判った教授の人柄や学識は、是非日本に来て頂いて多くの同学の士に知って貰いたいと考えようになった。そこで同年8月カナダでの国際会議に出席された都立大の矢沢大二教授にこの件をお話しして、御考慮いただくことにした。矢沢教授は帰国後、奔走されて早速招待を試みられたが、直ぐには実現しなかった。続けて同教授が中心となって学術振興会の招聘研究員として申請し、三年目に漸く実現した訳である。私のウプサラ滞在の後、都立大の

徳永英二助手、法政大の三井嘉都雄教授が長期滞在され、今も筑波大の田口氏が滞在中と聞いている。日本からの研究者の滞りがひき続くきっかけとなったのが、私の偶然からだったような気もしている。

余り雨の降らなかった昨秋、教授の日本訪問の結果は、多くの人々の協力で充分御満足のゆくものとなった。私は教授御夫妻を自分の車で、箱根、富士、甲府と二泊三日の間御案内した。秋晴れの富士の五合目付近の自然の姿には特に感動された様子であった。これでスウェーデンでお世話になった御恩にいくらかでも報いることができたのではないかと思った。学問や研究の世界でも、その根底には人の交流や人間関係の融和が必要なのだとつくづく思われる。 (1978年1月15日)

女性と新聞

井内 昇

或るサラリーマン一年生とその母親との対話。

「女性が電車の中で新聞を読むのを見てどう思う？」

「道を歩いていて、二階の窓から見下ろしている犬と視線が合った時の気分になるよ」

「それ、どういう意味なの？」

「つまり、生意気だな、という感じさ」

これは昨年の秋頃、朝日新聞に載っていた、「女が電車で新聞を読む」と題した小さな投稿記事の一節である。

この筆者(50才前後の婦人)は、最近では女性の市民運動への参加も活潑になり、意識もかなり違ってきたと思われるのに、車内で新聞を読んでいるのは男だけ、という風景が10年前と変わらないのは、20代の若い男でさえこのような見方をしていることからわかるように、男性上位の意識がなお社会的に根強く残っていて、そのような社会環境の中で女性が車内で新聞を拡げるにはかなり抵抗があるため、と解釈している。しかし、筆者はまた、その背景として、一日のうちで新聞に要する平均時間が女は男より少ない、という事実を挙げ、これは女の関心が家族や衣食住に向けられ、社会への関心がうすいからではないか、という疑問も投げかけている。

車内で新聞を読むことが適当かどうかは別として、この記事は私の興味をひいた。というのは、最近の女子学生諸君はあまり新聞を読まないのではないだろうか？もしそうならそれは何故だろうか？と疑問に思っていたからである。

世はまさに情報の洪水の時代である。テレビ、ラジオ、その他マスメディアにはこと欠かないが、それらの中で一番質が高く、しかも新しい情報をとどけてくれる媒体として、現在、新聞に勝るものは無いであろう。新聞といえば、米国の元大統領アイゼンハウアーは、在任中、1週間にN.Y.タイムズ日曜版を眺めるだけであったが、次のケネディは速読術を身につけ、毎日20種近い新聞に目を通していたという。日本には、スポーツ記事しか読まない、と公言した総理大臣が居たが、日本の政治の程度が低い一因はその辺にあるのかも知れない。

前にも書いたが(17号)、私は社会科学の領域を学ぶ学徒は、基礎的な学術書や古典を精読する